

つばきの下のすみれ

小川未明

青空文庫

一本ほんのつばきの木きの下したに、かわいらしいすみれがありました。
 そのつばきの木きは、大きおおかったばかりでなくて、それは真紅まっかうつくな美しい花はなを開ひらきました。この花はなを見みた人ひとは、だれでも、きれいなものをほめないものはなかつたほどであります。

「まあ、なんとというみごとな花はなだろう。」と行って、みんなは、そのつばきの木きの周まわりをまわり、火ひのもえたつような花はなに見みとれました。

すみれは、やはり、そのころ、紫むらさき色いろのかわいらしい花はなを咲さいたのです。しかし、この大きおおなみごとなつばきの木きの下したにあつては、人ひとの目めに入はいるにはあまりに小ちひさかった。あわれなすみれは、

それで、心こころなしに歩あるく人々ひとびとから、頭あたまをふまれたのです。

せつかく、春はるに遇おうて、これからあたたかな、暖あたたかい太たい陽ようの光ひかりを浴あびて、ちようや、みつばちの歌うたを聞きいて、楽たのしい日ひを送おくろうと思おもっているまもなく、花はなも、葉はも、ふみにじられて、見みる影かげもなくななつてしままいました。

それは、すみれにとつて、どんなに悲かなしいことでありましたでしよう。つぎの年としも、またつばきの木きには、真ま紅つかな大おおきな花はなが、たくさんに咲さきました。人々ひとびとは、みなその近ちかくに寄よつて、これをながめて、

「なんとうつく美しい花はなだろう。」といつて、ほめないものはなかつたのです。ちようど、そのとき、すみれがやつと、小ちいきなつば

みを破やぶつて紫むらさきいろ色いろの花はなを開ひらいたのです。

「ああ、なんとという私わたしは不幸ふこうなものだろう。だれも、私わたしに目めをとめてくれるものがない。またじきに、だれかにふまれてしまう運う命めいであろう。」と、わなわなどと、身みを震ふるわしていました。

すると、この家うちに、竹子たけこさんというやさしい少しょう女じよがありました。やはり、裏うらの庭にわに出でて遊あそんでいましたが、ひとり、竹子たけこさんだけは、星ほしのようなすんだ、うるおいのある瞳ひとみを、つばきの木きの下したのすみれの上うえにとめました。

「ここに、すみれがあつてよ。あたしは、すみれが大好きだいすなの。こんなところにあつては、みんなに踏ふまれてしまうわ。」といつて、はじめて竹子たけこさんは、すみれに注ちゆう意ういしてくれました。

すみれは、どんなにうれしく思ったでしょう。心こころの中で、ほんとうにお嬢じょうさんに見みつけられなければ、また人ひとに踏ふまれてしまうか鶏とりにつつかれて、芽めを出だしたかいもなく、見みる影かげもなくなってしまうものだと思おもいました。

「あたしは、すみれを鉢はちに移うつしてやりましょう。」と、竹子たけこさんはいって、すみれをば地面じめんから離はなして、素焼すやきの鉢はちの中なかに移うつしました。すみれは、自分じぶんの生うまれ出でた地面じめんから離はなされることは、たいそう悲かなしゆうございました。もう二度どと太陽たいようの光ひかりは見みられないういでなからうか、そして、あの夜々よよに、大空おおぞらに輝かがやく大好きな星ほしの光ひかりを望ぞむことができないのでなからうかと、愁うれいました。また、やさしいお嬢じょうさまのなさることだと、安あん心しんをしていまし

た。

竹子たけこさんは、すみれの植うわった鉢はちを、自分じぶんの勉べん強きようする机つくえのそばに持もつてきました。すみれはそこで、目めざまし時計とけいや、きれいな表紙ひょうしのついている雑誌ざっしや、筆立ふでたてや、また、竹子たけこさんが、がつこう学校がっこうで稽古けいこをなさるいろいろな本ほんなどを見みることができました。しかし、この生せい活かつは、すみれにとつて、あんまり好このましいものではなかつたけれど、つばきの木きの下したにいて人にん間げんに踏ふまれたり、鶏とりにつつかれたりすることを考かんえたら、とても比ひ較かくにならぬほどしあわせなことでありました。もしここで、太たい陽ようの光ひかりと、星ほしの輝かがやくのが見みられ、そして、みつばちや、ちようがきてくれたなら、すみれは、おそらくこんなに安あん全ぜんな生せい活かつはなかつたのであり

ましよう。

すみれの花は、しばらくの間は、竹子さんの机のそばで咲いて
いました。竹子さんは、水をやることをけつして怠りませんでし
た。そして、いつしか、すみれの花も終わりに近づいてきました。
すみれは、そのころは、もう家のうちの生活にあきてしまつて、
ふたたび、大地の上に帰りたいたいと思う心が、しきりにしたのであ
りました。

「お母さん、すみれの花は、もうおしまいですね。」と、ある朝、
竹子さんは、お母さんに向かって、いいました。

「ああ、もうおしまいですよ。」と、お母さんは返事をなさいま
した。

「これを地面じめんにおろしてやりましょうね。」と、竹子さんたけこは、またお母さんかあに聞ききました。

「そうです。来年らいねん、また、花はなが咲さくから、おろしておやりなさい。」と、お母さんかあは、答こたえられました。

「どこが、いいでしょう。」

「いつかあったところが、やはり地ちが、すみれに合あっていいでしょう。」

すみれは、竹子さんたけこと、お母さんかあの話はなしを聞きくと、ふたたび大地だいちに帰かえられるのを知しって、うれしくてたまりませんでした。

竹子さんたけこは、すみれをもとはえていたつばきの木きの下したにおろしました。そして、人間にんげんにふまれたり、鶏とりにつつかれないように、

棒を立て、すみれを保護したのでありました。すみれは、そのことをどれほど深く、ありがたく思ったかしれません。

すみれは、安心して、長い月日を送りました。秋がきたときに、葉は枯れ、そのうちに冬となつて雪が降つて、地面も、つばきの木も、みんな、雪の下になつてしまいました。

明くる年の春のことであります。つばきの花が、真紅に咲く時分に、やはりすみれも紫の花を開きました。しかし、去年、竹子さんが棒を立ててくれましたので、いまは、人にふまれたり、鶏につつかれたりする心配はなくて、まことにすみれは安心して、太陽の光を浴びて、のどかな日を楽しむことができたのです。

「これも、みんなお嬢さんしじょうのごしんせつからだ。」と、すみれは
 おも 思いますと、一時じも早くはや、やさしい竹子さんたけこの姿すがたを、見みたいもの
 だと思おもったのです。

すみれは、竹子さんたけこの姿すがたを慕したい、憧あこがれましたけれど、やさしい
 しょうじよ 少女すがたの姿すがたは、ついにわに庭にわには現あらわれなかつた。それもそのはずの
 こと、竹子さんたけこは、雪ゆきのまだ消きえないころに、叔父おじさんにつれら
 れて、都みやこの学がっこう校がっこうへゆかれたのです。

すみれは、なに不足ふそくなかつたけれど、ただお嬢さんしじょうの姿すがたが見みら
 れないのを悲かなしんでいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「小学少女」

1922（大正11）年4月

※表題は底本では、「つばきの下《した》のすみれ」となっています。

※初出時の表題は「椿の下の堇」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

つばきの下のすみれ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>